

子どもが一番受け止めてほしい気持ちって？

岩上 節子

ある日の五歳児三人とY先生の会話

A 男 「先生、先生はこのチームが好き？」

Y先生 「私？ そうねえ……。ヤクルト！」

A 男 「僕は日ハム！」

B 男 「僕は、ダイエー！」

C 男 「僕は……、マルエツ！！」

——子ども達の誰一人として疑問を持たずに話が進んでいくなかで、Y先生一人笑いをこらえていたらしい。保育が終わるや否や、Y先生が「ねえねえ聞いて……。」と笑いながら話しかけてきました。その話を聞いた私は、Y先生ともども大爆笑。「おかしいけど、確かに共通項

はそろっていますよね」食べ物系というか、スーパー系というか……。C君の家、マルエツの近くののかもしれないですね。それにしても、C君の頭、フル回転だったんでしょうね」と、ひとしきり盛り上がったのです。

この場合、「皆で野球チームの話をしよう」というA男の発案に、皆が誠意をもって応えてくれたという点で、A男には満足であったと思われます。B男とY先生は、皆でやりとりすることそのものが楽しく、話題を共有する楽しさを味わえたのですから、こちらも満足していたと言えるでしょう。C男はC男で、彼なりに考えて話に参加した結果、みごと受け入れられたので、やは

り、満足したと思われず。多少の誤解はあるものの、四人ともそれなりに満足のいく結果を得ているのですから、この際、マルエツという野球チームが実在するかどうかなどということは、たいした問題ではありません。どうせいつかはわかることですし、マルエツ球団が将来出現しないとも限りません。それに何と言っても、そんなこと誰も気にしていませんから。

さて、今度は私のクラス（三歳児）の男の子二人と私の会話です。

D男「先生、昨日ヤクルト連勝したんだよね」

私（『連勝』なんて難しい言葉使うなあ。そういえば、一昨日ヤクルトが連勝していたような……』と
思いつつ）「そうね」とあいづちをうちます。

E男（いかにも同感だという様子で）「うんうん、芋は焼くとおいしいよね」

——「何だこいつ」という風にE男の方を見るD男を横目に、思わず私は、笑いをこらえながらうつむいてしま

いました。『やく』しか同じじゃない。この二人の会話って、いつもこうなのかしら。けんかになるはずよねえ……』と思いつつながら。子ども達の会話って飽きないのです。

とはいえ、その時のD男の本来の発言理由は、先生、僕と話をしよう”ということにあり、この点に関する限りは何の支障もなくクリアしてましたから、彼は満足していたといえ、したがって、D男とE男の関係は特に関心が発展しなかったのだ、と言うことができると思われず。E男は、D男と先生の会話に、自分なりに共感を示し、それを表明し、なおかつ、ピントがずれていることに全く気付いていないので、もちろん満足していただしよう。私は私で、ただ単純にその会話を楽しんでいたので、普段仲が良いにもかかわらずけんかになってしまふ二人が、どのようにしてずれていくのかという過程を、ほほえましく垣間見ることができたという点で、担任として興味深く思っておりました。結局、三人とも、その場はそれなりに満足していたのです。

さて、また別の話。三歳児クラス十一月のある日の出来事です。

F男が、年長児の空箱で作った飛行機（もしくは戦闘機）を見て、「自分も作りたい」と言うので、空箱と一緒に作り始めました。他の子ども達も何人か集まって来ます。「先生、僕にも作って」「私もやりたい」「これ使っていいの?」と状況のとらえ方、アプローチの仕方は様々ですが、皆、F男と先生のこと「に刺激を受けて、自分なりに取り組み出したという点では共通しているように思われました。G男は「F男とまったく同じものを先生に作って欲しい」「らしく、そばでまっています。H子は「空箱を使うことそのものがおもしろい」「らしく、空箱を並べて、セロファンテープでいいいに貼り始めます。I子は、空箱をつぶして（平面にして）それを二つに折りセロファンテープでとめ、にっこりと私をみつめます。どうやら「できた」「らしい」ということはわかっても、それが一体何なのか、私には皆目見当もつきません。わからないながらも「できて良かった

ね」という気持ちを込めて、こちらにもっこり微笑みます。その隣で、J子が太鼓を作っています。空箱に割りばしをつけて、それをもう一本の割りばしでたたくというシンプルなものですが、本人は大満足です。魅力的に映ったのでしょうか、まわりの子ども達も、自分の作っていたものに割りばしをつけて、あっという間に「私（僕）達皆、太鼓を持っているの、ねー!!」グループが出来上がりました。遊びの主流は「F男と先生のこと」「から「太鼓づくり」「へ、そして「太鼓たたき」に移ったようでした。F男自身も、飛行機はしまつて、自分の太鼓を作り上げています。

『大きな太鼓』や『幸せなら手をたたこう』などのたつきもの、のソングを歌いながら、私達はおおいに楽しみます。個人的にも大声で歌うのが好きな私は調子にのつて、「今度は、ピアノも弾いてあげましょうか。」と親切そうに言い出します。実は、ピアノを弾きながら歌うのも大好きな私なのです。たいして上手くもないのですから、押し付けがましいことこの上ないのですが、気のい

子ども達は「わーい」と喜んでくれるので、私もうれしく思います。「趣味と実益をかねた、とはまさにこの状態」と思いつつ、ますます調子にのって弾き、歌い始めます。私も子ども達も、「気分は小コンサート」といったところでした。ところが、しばらく楽しんでいるうちに、私はふと、「担任として、全体状況の把握に欠けているのではないか」と不安になり、「そろそろこの遊びからぬけよう」と決心しました。とはいうものの、今の遊びの盛り上がりも捨てがたく、この遊びが消えない様に上手くぬける方法を考え始めます。

まず第一に、「ピアノとうたにあわせて」ということが遊びの重要な要素であるにもかかわらず、私はそれを放棄しようとしていたのでありますから、それに代わるものを提供して、なおかつ、皆の合意を得る必要があると思われました。そこで、「じゃあ、次は『南の島のハメハメハ大王』を弾きます」と、今までのたたきもののソングから、十月の運動会で踊った曲に、選曲を変ええました。理由として、全員がよく知っており、しかも大好

きな曲であること、リズムをきざむのに適した楽しい曲調であることなどに加えて、子ども用カセットデッキのパンピングと録音テープが、子ども達の使い慣れている遊具のひとつとして、クラスに常備されていたことがあげられます。このことは、今まで踊ることや聴くことのみ使われていた遊具が、(仮に遊びの分類として表現するのであれば)楽隊ごっこにも使えるのだと気付ける点で、今まで以上に遊びの可能性を広げることにもつながるように思われました。子ども達だけで遊びが続けられる状況作りという本来の目的にかなっているのは言うまでもありません。保育的配慮という名のもと、少々打算的かつ一石二鳥を狙った欲ばりな選曲にもかかわらず、「えっ、先生この曲も弾けるの」という驚きと尊敬とともに、子ども達は楽しそうに歌いながら太鼓をたたいています。私は内心「しめしめ」と思いつつ、最後の仕上げにかかります。「そうだわ、今度はテープでやってみない？」といかにも急に思いついたかのように提案してみました。

J子、K子、L子の三人は、「わーいわーい」と喜んで、即座に、パンプキンとカセットテープのおいてある棚の方にかけていきます。「やった、大成功」と私の見守るなか、何故か三人は目的地を少しずれて、同じ棚の右はじに置いてあったセロファンテープ台からテープを切つて、うれしそうにもどつて来たのです。三人が三人とも！「わーい。先生、今度は何するの？」

——「まったく、あの人達、何が楽しいと思つたんでしょうね」と、保育おもしろ話のひとつとして、いろいろな人に話しているうちに、私の気持ちはいだんだん変わつていきました。「私は、先生と子ども達で演奏をすること」をともに楽しんでゐるつもりだったのだけれども、子ども達、少なくとも、J子とK子とL子の三人は「先生と遊んでいること」の方をより楽しんでいたのではないだろうか」と。

この私の気付きを、確信に変えた出来事がありました。

M男は、月齢も低く、幼いクラスの中でもとりわけ幼さを実感させられる子どもです。うれしい時は素直に喜び、よく遊び、いろいろなことに興味を示し、また、それを試したがりです。そこが、彼の一番の魅力であると同時に、大きな課題ともなっています。他児の遊びに配慮なく、自分の興味のままに動きまわるので、いざこざの原因になりやすいのです。客観的にみれば、「相手の都合もおかまいなしにずかずか入りこんでしまうから、相手の子どもが怒つて、M男に挑みかかってきている」のですが、当のM男にその自覚がないので、どちらも気持ちがおさまりません。相手にしてみれば、M男が先に邪魔をしている上に、反省もしないので、いくら先生が「ここ痛かったの？」とか、「こわれちゃった所直してあげる」とか、「本当は、M君こわすつもりじゃなかったのよ。ししたかっただけなのよ。」とか言つても、つもりはなくても、やったじゃないか。不愉快なもの不愉快なのであります。M男の方はM男の方で、相手に何も悪いことをして（しようと思つて）

おらず、ただ好きな遊びをしているだけなのに、危害を加えられたという認識しかないのです、やはり、腹立たしい気持ちはおさまりません。先生が、「痛かったのね」とM男の痛さに共感しようが、「○○ちゃんが遊んでいたところに急にM君が入ったから、ここ壊れちゃったのよ。だから、怒っているの」と状況説明しようが、それに気付いて受け入れられるほどの経験や育ちが、まだまだ十分ではないのです。保育者としては、M男が、いろいろな経験を重ねて育っていきけるように支えることと、「M男は迷惑な子」というレッテルを貼られないように他児とのなかだちをしていくことに気持ちをさしている日々が続いていました。

そんなある日のことです。M男は、クラスの数名の子ども達とダイレンジャーごっこをして遊んでいました。イメージを共有して遊ぶ楽しさを十分に味わうことが、M男自身の肯定感をより安定したものにし、自分とは違う相手の気持ちに目を向けるようになる上でも大事な経験となるように思われ、私は、担任としても、その様子

をうれしく見守っていたのです。ところが、ふとしたはずみでM男がけがをしてしまいました。近くで遊んでいたN男（四歳児。M男とは遊び仲間でもある）とじやれあっているうちに、スコップ（砂場用のプラスチック製の遊具）を手に持ったの戦いごっこになり、あたりどころが悪くて、けがをしてしまったのです。急いで保健室で手当てをしてもらったのですが、双方悪意がなくて遊んでいただけに、予想だにしかかった結果に、N男の動揺は激しいものがありました。M男の方が、手当てをしているうちに落ち着いて来て、こちらの心配をよそに、「遊びに行く」と言い始める始末です。そこへ、N男が泣きそうな顔で「ごめんね」と謝まったのです。すると、M男は非常に驚いた様子で、とっさに「ごめんね」と返事をし、急に「アハハハハ……」と笑い出しました。その場の緊迫した雰囲気になたような、そんな笑い方でした。はたで見ている分には、M男はM男で「さぞかし痛かろう」と思わざるを得ないけがの状況だし、N男はN男で「加害者になってしまったという精神

的痛手を負ってもしかたがない」とこちらも覚悟を決めざるを得ない状況であり、本当に、保育者としての配慮に欠けていたとしか言いようのない状況での、思いがけないM男の「ごめんね」であったのです。「アハハハハ……」という笑い方が、その場の重い雰囲気を変えようとするM男の精一杯の試みのように感じられ、「M君、有難う」と思わずにはいられませんでした。

——M男のけがも無事治り、M男とN男の間もこわれずにすんだ今、そのことを思い返してみると、私は次のようにM男に対する見方を改め、自分のかかわり方を反省する必要があると思われます。確かにM男はいざこざの原因となりやすく、また、それに対する自覚に欠けていて、これは大きな課題です。でも、そのいざこざに対するM男の怒りは、「相手に危害を受けたから」ではなく、「自分に危害を加えたにもかかわらず、相手がそれを認めないから」ということであつたのです。M男にとって悲しいことは、「痛いこと」なのではなくて、「相手が自分に対して悪いと思っていないこと」つまり、「相手が

自分という人間を大切に思っていないこと」だったので、あんなに痛そうなけがをさせられたのにもかかわらず、M男が、N男を最後まで一言も責めなかったのは、「N男は自分を大切に思っている」と感じ、それを受け入れていたからだと思うのです。

保育という場にかかわっていると、思わず笑ってしまふことが沢山あります。反省することも沢山あります。子どもの可能性に、思わず頭が下ってしまうことがあります。「おもしろかった」「申し訳なかった」「すごいと思った」といった感想ですませてしまっていることが沢山あります。そう思う自分の感覚はずっと持ち続けたいと思うけれど、そのままでもいいとも思いません。それを、ちゃんとみがいていきたいと思ひます。

「マルエツ」と言つたC男も、「やくると…やくると…やくと…」うんうん、芋は焼くとおいしいよね」と言つたE男も、仲間の一人として認められたかつた本当の理由は「相手が好きだから」です。話の成り行きのお

もしろさや友達関係の分析にばかり心を奪われて、子ども達の一番くみとってほしい気持ちを見落としていた私がいいます。

J子、K子、L子らが、先生に遊んでもらってうれしかったのは「先生が好きだから」です。これを自覚するには、かなりの勇氣と責任感が必要で、本当は「私なんかダメなの」と言っている方が気が楽なのだけでも、認めざるを得ません。子ども達の私に向ける気持ちを、十分に受けとめていなかったことを認めます。

M男は、N男の「これだけは受け止めて欲しい気持ち」をまっすぐに受け止められる人でした。M男の目先の課題にとらわれて、彼の「悲しい気持ち」に気付かず、受け止めず、援助しているつもりになっていた自分をみつめました。

私は未熟な人間で、しかも、未熟な自分も気に入っているから、なかなか立派になりません。子ども達一人一人の細やかな心のひだには到底反応しきれません、と妙

に開き直ってしまう時があります。でも、だからこそ、時には細やかに心を配って、子ども達が本当に受け止めてほしい気持ちを、その時、その場で、何気なく受け止めている私でありたいと願います。保育者として、子どもを何を支えていくかということを、ずっと考えていきたいと思えます。

(幼稚園教諭)

